

＊ ＊ポリオとテレビキャンペーン＊ ＊

昭和35年、日本でポリオの大流行がおきました。その翌年から生ワクチンの接種が始まったのですが、そこには、子供をもつ親たちの働きかけとともに、テレビのキャンペーン番組の役割も大きかったようです。当時のことが、放送評論家志賀信夫氏が新聞に連載した「テレビ35年裏面史 ブラウン管を彩った人と事件 - - キャンペーン番組とポリオ」（1988年）に書かれています。 資料提供ポリオの会佐瀬美栄子さん

＊ - ＊ - ＊ - ＊ - ＊

「テレビ35年裏面史 ブラウン管を彩った人と事件 - - キャンペーン番組とポリオ」 志賀信夫 「日報作り速報性発揮」発生患者数を即日集計

キャンペーン放送が日本で最初に行われたのは、昭和二十三年ごろ、CIE(GHQ民間情報教育局)が放送を通じて民主主義キャンペーンをやり出したときからだ。

そんな彼らのおしつけのせいもあり、当時、キャンペーンというと非常に自主性のない、受動的なもののような印象をもっていた。

NHKは昭和三十五年に「青少年に希望を」「日本を知ろう」などのキャンペーンを正面に出したが、36年から始めたポリオキャンペーンが成功した最初であり、上田哲(現・衆議院議員)が発案した。根本良雄(元・放送世論調査所長)は「NHK歳末たすけあい、夏季移動相談、公明選挙などのキャンペーンの積み重ねがそのペースにあった」と語っていた。

「NHK社会部記者」の中で、今は亡き神戸四郎は次のように書いた。

「昭和三十五年暮れもおしせまったある夜、定例の遊軍会(社会部遊軍記者の集まり)が開かれた。その席で「ポリオをNHKの力で撲滅することができるのです」と、上田記者は分厚いメモ帳を取り出し、熱っぽく話し始めた。われわれ先輩はおうように構えて彼の話を聞いていた。……「ポリオって一体何かね」と質問するお粗末さだった。上田記者は素人にも分かりやすく説明してくれた。「ポリオというのはポリオミエリテイスの略語です、ポリオとは灰白の、ミエリテイスとは脊髄(せきずい)炎、つまり急性灰白髄炎のことをさします。ポリオはビールスによる伝染病です。この悪魔は口や鼻から人間の体の中に入り、運動神経をつかさどる脊髄の灰白質部の前の部分をおかす。これが脊髄性小児マヒです。これに対して脳性マヒがあります。これは難産や早産のため脳に出血したり、脳の細胞が傷を受けたりして起きることが多いのですが、伝染病ではありません」

三十五年二月、北海道大夕張で四歳になる女の子が小児マヒで幼い命を奪われ、北海道衛生部が対策本部を設置した七月七日には患者数は前年の七倍の百八十二人に達し、その年北海道を中心に全国的にポリオが大流行、患者総数は五千六百六人、うち北海道は千六百九人(死者百六人)を記録した。

NHK報道局社会部内に、三十六年二月、「ポリオ班」が発足、上田、神戸のほか、福田照明、杉林廉、川上隆弘、土屋通幸、石井三郎、田畑彦右衛門が参加した。

「キャンペーンの基本方針は、

第一に、この夏のポリオ流行の危険を明らかにすること。

第二に、一日も早く一人でも多くソークワクチンの注射を呼びかけること。

特に第三に、生ワクチンの啓蒙につとめ、「根絶」の目標をすっきり打ち出すこと」(上田哲著「根絶」)であり、「大切なことは「治療」ではなく「予防」である。「撲滅」ではなくて「根絶」である」とした。

直ちに十数本のキャンペーン番組企画が練りあげられたが、何といても最大の基礎になるのは

「ポリオ発生数即日集計」。四月十五日からスタート、日本中で発生するポリオ患者を正確に医師から保健所へ報告を求めるのが午後五時半。保健所から各県衛生部へ報告をまとめるのが六時半。それらの報告をNHK各放送局で集計するのが七時、それを東京ポリオチームが受けとるのが七時半。こうして一枚の「ポリオ日報」となった。

ポリオ日報は「本日発生」「本日死亡」「昨年同日発生」「昨年同日死亡」「本日総計」など、北海道から九州まで地域別に書き込まれ、放送の速報性の強さを発揮した。

「1300万人に生ワクチン」投与率91%で患者激減

『ポリオ日報』をもとにして、三十六年四月十六日からNHKはニュースの中でポリオの発生状況の放送を始めたが、多くのキャンペーン番組には問題がないわけではなかった。

「朝日新聞」の「週間モニター」（36年4月18日）によると、次のような評も出た。

「先週からはじまったNHKの小児マヒ・キャンペーンは多彩な構成で苦心のほどもうかがわれるが、いずれも朝とか夜遅くとかで、効果半減。……肝心のゴールデンアワーを避けて通るキャンペーンの考え方を根本から考えなおす時期だ」

「ここに人あり」は夜九時三十分からの三十分ドラマ枠で、三十五年十月に放送した高垣葵作「親ごころ」は、小児マヒで自由を失った子どもの両足をなんとかして動くようにしようとする父親の涙ぐましい父性愛を描いて、話題となった。だが、テレビでは「あすへの歩み」など、多くのキャンペーン番組はプライムタイムからはずれていた。

厚生省は三十六年五月からソークワクチンだけでなく生ワクチンの使用を考え、生ワクチンの緊急輸入、投与を決めた。そこで、NHKはさっそく生ワクチンに対する不安の解消、生ワクチンの服用の奨励とポリオの根絶を目指すキャンペーンをくりひろげた。テレビは六月二十八日から新しく「小児マヒ情報」の時間を設けて、患者の発生状況など最新の情報を伝えることにした。水曜日夜八時二十六分から四分間、テレビドクター近藤宏二が出演して解説した。

そのほか、六月末からは「婦人の時間」や「朝の訪問」などで、生ワクチンの効果や投与時間、方法について解説する番組を編成した。全国一斉投与があと三日に迫った七月十七日、月曜日夜「私の秘密」では、高橋圭三アナが机の下から魔法瓶を取り出し、ボンボン状の生ワクチンを一粒つまみ、「へえ、これがあの生ワクチンですか。日本中からポリオをなくしてしまう……」と語り、「どれどれ、はあ、いやあ、これはうまい。うまい。本当にこれはアメ玉ですね」と弁じた。

民放もキャンペーンに力を注いだ。NTVは六月二十日「小児マヒに勝った!」、七月一日の「婦人ニュース」で「小児マヒから子供を守ろう」を放送し、NET(現テレビ朝日)は、同四日「小児マヒの知識」、フジテレビは五日「日本の歩み」で「小児マヒと闘う子供」などを放送した。

七月二十日、東京をトップに、大阪、京都、愛知、宮城、秋田、青森などの七都府県で、生ワクチンの一斉投与が始まった。こうして二 - 三週間の間で全国に投与が完全に実施され、最終的には千三百万人の子どもが生ワクチンを飲んだ。

これは、乳幼児の九一%というべき高い率となった。このパーセンテージは、種痘の接種率を二〇%近くも上回り、ジフテリアの五三%と比較すると、四 %も高いものであり、非常な成果を収めたことを物語っていたといえる。

ポリオ患者の発生数は、この千三百万人の子どもたちが、生ワクチンを飲みだしたあとから順次、下降線をたどりだした。八月三日には、最大の流行地だった熊本、福岡両県で一人の患者も発生しなかった。全国では八月二十日以降、新しい患者は急激に減った。

そこで、NHKは八月三十日、六月から放送してきた「小児マヒ情報」を打ち切り、一応キャンペーンを閉じた。この年発生したポリオ患者は二千四百三十六人、死亡者は百六十九人であった。痛ましい数字である。

「知的活動へののろし」チャリティー番組続く

ポリオ生ワクチンの発明者セービン博士が、昭和36年九月、NHKの招きで来日、厚生省の決定があつてからわずか一カ月の準備期間を置いて、二・三週間で千三百万人の子どもに、どのようにして生ワクチンを飲ませることができたかについて、最も関心をよせた。

そして「衛生当局(医師、報道機関、小学校の教師、国民、特に全国の母親の協力が、あつて初めてできたことである」と感想をのべて、米国シンシナチ大学に帰った。

NHKはその報道機関の一つであることはいうまでもないが、36年2月からの第一次、37年に入ってからの第2次とキャンペーンを二度も張り、第一次では生ワク大量投与の効果を決定的なものにし、第2次では「あと一息で小児マヒ根絶を」を目標にした功は大きかった。

ことに後者では、番組の切れ目のステーション・ブレイクを利用、「あと一息で小児マヒをなくせます。まだ生ワクチンを飲んでいない子どもには早く飲ませましょう」としばしば呼びかけたのは効力を発揮した。

これらのキャンペーンをまとめてみると、厚生省もつかみきれなかったポリオ患者の発生をNHKのネットワークを使つて的確にとらえたこと、生ワクは危ないんじゃないかという学者の説もあり(踏み切れずにいたのを学問的な見地からも生ワク義務接種へ伸展させ、それを広く実現させたことの二つが、最も高く評価される。

それにしても、ポリオに関する知識や情報を、NHKが絶えず流そうとした点は注目すべきであり、テレビ媒体がこうした知的な高まりに役立つことができたのはまれにみる現象であつた。そんな異例な知的活動がテレビで実現できたのは、東大小児科の平山宗宏博士などの協力があつたことはもちろんだが、生命にかかわるキャンペーンだからだろ。

ポリオ予防のためのキャンペーンだったが、それが山をこえてからは、NHKでは病気にかつた人の救済のための番組を放送した。後遺症のある幼い患者の治療や養育方法を正しく指導する目的の番組「テレビ整肢学校」はこうして三十六年四月にスタートした。

民放では、小児マヒ患者救済のチャリティーショーを開き、募金活動を行った。「今、僕は空を見ることができる」という題名の放送は、その模様を知らせたものであり、四十年二月、まずTBSと東京12チャンネル(現・テレビ東京)、続いてフジテレビ系、NTV系、NET(現・テレビ朝日)系と、沖縄をのぞき全民法46社で放送された。

この番組は、日本タッパーウェア株式会社社長・ジャスティン・ダートが、十八歳の時に小児マヒにかかりながら、苦難を克服してきた自分自身の体験に基づいて、小児マヒの子どもたちを励まし、救済の手を差し伸べるために企画したものだつた。

「自分のすべてが、何でも映ってしまうからテレビには出ない」と語っていた高峰秀子が(小児マヒの子どもたちの作品をつづつた詩集「夢と希望」の中から数編の詩を選んで朗読した。そして「この詩集を買って下さい」と視聴者に呼びかけた。

このダートの動きとは別に、四十年二月六日、森繁久弥、伴淳三郎、水上勉ら芸能人、作家等が、小児マヒ救済の「あゆみの箱」募金運動第一回チャリティーショーを、東京・新宿の厚生年金会館で開き、翌七日フジテレビが放送した。この「あゆみの箱」運動は長い間続いた。ポリオキャンペーンは姿を消したが続いてチャリティーを生んだ。